

**京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書**

平成21年9月8日

財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究科

職 名・学 年 博士課程3年

氏 名 横 森 大 輔

事 業 区 分	平成20年度・長期派遣助成		
研 究 課 題 名	日本語会話における「意識の流れ」の記述		
受 入 機 関	カリフォルニア大学サンタバーバラ校		
渡 航 期 間	平成20年8月24日 ~ 平成21年8月10日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有( )		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	2,500,000 円	
	使用した助成金額	2,500,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	航空賃, 空港使用料, サーチャージ等:	182,690 円
		査証手数料:	19,650 円
		宿泊費:	1,669,200 円
		日当:	628,460 円
	-----		
	-----		
	-----		

## 成果の概要 / 横森大輔

2008年8月から一年間、京都大学教育研究振興財団からの助成を受けて、米国カリフォルニア大学サンタバーバラ校 (UCSB) の言語学部に Visiting Scholar として滞在した。

UCSB 言語学部は、今回の受け入れ教員であった John Du Bois 氏および Patricia Clancy 氏をはじめ、Wallace Chafe 氏、Sandra Thompson 氏など、自然談話データに基づく文法研究を推進する第一線の研究者を数多く擁しており、談話機能主義言語学 (Cumming and Ono, 1997) の世界的な拠点といっても過言ではない。また、自然談話データに基づいて文法研究を行うためには収録されたデータを一貫した方針に沿って文字化する必要があるが、この文字化 (= 書き起こし) のシステムに関しても、Du Bois 氏を中心とした UCSB の研究チームが体系的な手法を開発し (Du Bois *et al.*, 1993)、世界の研究者の中で先導的役割を果たしている。

報告者の今回の滞在目的は、博士論文執筆に向けて、(1) 書き起こしの技法を習得し、日本語の会話コーパス構築にあたっての応用可能性を検討すること、および (2) 日本語会話のデータ分析について UCSB の教授陣から指導を受けること、の二点であった。以下、それぞれの点について、成果を報告する。

### (1) 書き起こし技法の習得・日本語への応用可能性の検討

まず、9月第4週から12月第1週までの秋学期において、Du Bois 氏による大学院講義 "Discourse Transcription" に参加した。クラスでは「イントネーションユニット」(Chafe, 1980) の概念を中心に書き起こしの基本的な方法論を学び、クラス課題として自分自身が収録した日本語会話の書き起こしを行った。受講者は報告者を含めて計8名(大学院生4名、Visiting Scholar 4名)で、二名一組でチームを作り、クラス時間外に互いの書き起こしをチェックし議論することが求められた。また、全体講義(一週間に二回、計4時間)とは別に、週に一度の頻度でチームごとに Du Bois 氏との面談を行った。これらの講義・実習・議論を通じて、これまでの Du Bois 氏の著作で言明されていないような、書き起こしの背景的思想や数多くの TIPS を知ることができた。

書き起こしについて学んだうち、最も意義深かったのは「イントネーションユニット」(IU)の認定手法に関するものである。IU とは、「ひとまとまりとして知覚される音声の単位」であり、文法構造と談話構造(あるいは「意識の流れ」との関わりをとらえる上での鍵概念とされる。しかし、IU という現象の性質上、その認定のための機械的な基準は存在せず、熟練者の元で十分なトレーニングを積まなければ適切に認定することは難しい (Chafe, 1994)。また、そもそも英語データの書き起こしを基に確立された概念である IU が、どのように日本語に適用できるかは、研究者の間でも未解決の課題である (岩崎, 2008)。このような状況にあって、IU に関する世界的第一人者である Du Bois 氏の下、上記の通りインテンシブなトレーニングを受け、また日本語の書き起こしについて直に意見交換できたことは、UCSB に滞在したからこそ実現した、非常に貴重な経験と言える。

また、UCSB 言語学部には、日本語会話データを必要としている日本人研究者が、報告者の他に二名いた (Visiting Scholar 1名と大学院生1名) ため、日本語の会話コーパスの構築に向けた共同プロジェクトを展開することができた。具体的には、(a) Du Bois 氏のシ

システムを日本語に適用する場合の問題点についての議論、(b)既に収録されており利用可能な会話データの整理と書き起こし、そして(c)新たな会話データの収録である。この共同プロジェクトは一年間に渡り継続し、データの蓄積はもちろん、日本語の会話コーパスを構築していく上での知見を大いに深めることができた。

さらに、Du Bois 氏の下でのトレーニングと、日本人研究者との共同プロジェクトを通じて得た知見を総合し、日本語会話の書き起こしに関する二種類のマニュアル文書を執筆した。一つは、書き起こしの「簡易版」作成のマニュアルで、主観的あるいは「職人芸的」な判断プロセスをできる限り排することによって、特別なトレーニングを積んでいない者でも、時間をかけずに一貫した書き起こしが行えるようになることを目指した文書である。もう一つは、「簡易版」の書き起こしを Du Bois 氏のシステムに忠実な書き起こしに「バージョンアップ」するためのマニュアルで、より専門的な指示や示唆を含んでいる。2009 年 4 月から試験的に、これらのマニュアルを利用した書き起こし作業を、複数の知人や大学院生に依頼しているが、これまでのところ非常に効率よく作業が進んでいる。

## (2) 日本語データの分析についての教授陣からの指導

書き起こし技法に関する研鑽に平行して、博士論文の一部となるデータ分析および、その分析に基づく教授陣との面談も、一年の滞在期間に渡り継続的に行うことができた。UCSB 教授陣はみな、担当の受け入れ教員であるかどうかに関わらず、快く面談に応じてくれた。

面談では主に、報告者が分析した日本語会話の事例をとともに再検討し、報告者による暫定的な一般化に対して意見交換する、ということを行った。また、議論の展開の仕方や関連する先行研究の情報を教示してもらうことも多かった。報告者の喋る英語や提示する分析がどんなに拙いものであっても、どの教授も常に熱心にこちらの言うことに耳を傾け、真剣に意見してくれたことが、強く印象に残っている。

滞在の前半期には、UCSB 言語学部保有の日本語会話データを用いて、主に「副詞節の後置」について分析を行った。この成果をまとめた論文は『言語科学論集』第 14 号に掲載された。また、この論文に基づき、2009 年 2 月に UCLA で開催された The 15<sup>th</sup> Workshop on East Asian Linguistics にて研究発表を行った。また、日本の共同研究者と進めていた「日本語における談話トピックのマーキング」についてのデータ分析についても、面談によって助言をもらうことができた。この成果は、2009 年 5 月に National Taiwan University で開催された The 3rd Conference on Language, Discourse and Cognition にて発表された(報告者は第二著者)。滞在后半は、上記の共同プロジェクトで新たに収集した会話データを用いて、主に「主節を持たない副詞節」について分析を行った。この成果については、現在論文にまとめているところである。

これら以外にも、多くの講義や研究会・学会に参加することで、アメリカ西海岸の自由闊達な学問的雰囲気浸りに、見聞を広めることができた。このような機会を与えてくれた京都大学教育研究振興財団に深く感謝したい。